

## 【編集後記】

だいぶ遅くなってしまったけれども文革特集を届けする。これは以前にもご案内した如く、NIHU-ICCS 政治外交班の外部研究者をも加えた文革研究プロジェクトによる成果の一部である。主題が主題であるだけにその見解もさまざまであることはいうまでもない。本特集における議論は、むろん違いはありながらも個々の論者の主張はそれぞれの経験を経た思考する実存の結実であり、記憶と記録の交錯する重い響きを湛えている。もちろん、本特集のような知的営みとはまた質の異なる別次元においても文革をめぐる再考はいろいろに行われている。たとえば、昨年発行されたオーヴィル・シェルとジョン・デルリーの共著『富強』(Orville Schell & John Delury, *Wealth and Power: China's Long March to the Twenty-first Century*, Random House 2013. 邦訳：古村治彦訳『野望の中国近現代史—帝国は復活する』ビジネス社 2014年)では、次のようなくだりがある。「歴史の冷徹な眼で見れば、毛沢東は、彼より前の世代の改革者たちが発揮しなかった、彼独特のニヒリズムを発揮して、中国の「古い社会」を破壊するという仕事を成し遂げることができ、それが最終的には伝統に固執することから中国人を解放することになった。このように見ると、毛沢東時代の暴力的な移行期間は鄧小平と彼以降の指導者たちが演出した経済発展にとって必要不可欠な準備期間であったとすることができる。毛沢東時代は、中国の人々にとっても、自分たちを過去から決別させ、富強のあくなき追求へと進むために必要な時期であった」(390 邦訳 454)。これはまた文革の遠景でしかなく、その内奥で何が進行していたのかかれらは知りようもないのかもしれない。ましてや、文革が「中国人」をめぐるいまだに継続する複雑な「闘争」の一部であったことも……。次号は〈「島」をめぐる帝国主義〉特集を予定している。乞うご期待。〔規〕